ボートモンスター　　第四章　【】

「うげ……」

　夏休み中ではあるが、今日は登校日。というより模試がある日だ。高校に入って初めての模試なので、俺もそれなりの心意気で望んだのだが、自己採点の結果は思いのほか微妙だった。別に悪くはないが、これはちょっと、先生に質問の一つや二つして、早めに解決したおいた方が良さそうだ。

「優斗、模試どうだった？」

　悠が俺の方に来て、そう聞いてきた。手には自己採点の結果が記入されている用紙が握られていて、俺の目に合計点数が飛び込んでくる。満点が六百点ということを考えると、４１１点はかなりいい方だろう。事務局員（よく言えば、生徒会のお手伝いポジ。悪く言えば、生徒会のパシリポジ）とはいえ、生徒会に所属しているだけあって、成績は流石といったところだ。

「微妙だな。帰り先生に質問してから帰るわ」

　俺はそう言って、自分の用紙を悠に見せる。

「私もちょっと微妙だった……」

　その点数でか……

「私も帰り質問してから帰ろうかな？」

「えっ？　なんだよお前等。放課後、学校に残んの？」

　金髪ピアスの蓮希が、用紙をヒラヒラさせながら、俺達のところにやってくる。

「今日、おっちゃんのところで大会が開かれるから、お前らと一緒に参加しようと思ったのによ……」

「大会？　ボトモンのか？」

「まあな。しゃあねぇな。俺一人で参加すっか」

　やれやれといった感じで、蓮希がそう言う。だが……

「面白そうだな。俺も行こうか」

「おっ？　マジで？」

「あれ、優斗、質問は？　模試、微妙だったんでしょ？」

　悠がちょっと驚いた様子で、俺に聞く。まあ、質問なら、学校始まってからでも別にいいだろう。

「大丈夫だよ。それに、俺に比べれば蓮希の点数なんか……」

　俺は笑いながらそう言って、蓮希の持っている用紙をめくり、合計点数を見る。ほら、俺との点数差は……３０点……だと？

「……蓮希、俺やっぱり今日はパス」

「えぇっ？　なんでっ？」

　俺は、自分の笑顔がだんだん引きつるのを感じた。俺の方がまだ点数は高いが、３０点という点数は、蓮希がもうちょっと頑張れば俺に追いつく点数だ。

「……いいんだよ！　大会はお前一人で楽しんでこい。後で応援しに行ってやるから」

「あ、じゃあ、私も応援に行く」

「お、おう。分かったよ……」

　何が何だか分からん、と言った風に蓮希はそう言うと、こちらを時折チラチラ振り返りながら自分の席へと戻っていった。

「……でも優斗、どうしてパスしたの？」

　悠は俺にそう聞くが、俺は目で合図する。流れで分かれ。言わせんな。

「……？」

　……どうやら、優等生のこいつには分からなかったらしい。

「……それにしても」

　校門を出て俺は呟く。思いの他、質問に時間がかかってしまい、もう夕方だ。大会はもう終わっているかもしれない。

「蓮希のやつ、いつの間に……それとも、俺の成績が落ちたのか？」

「そうだねぇ、多分、蓮希が頑張ったんじゃない？」

　悠が、笑いながら言う。俺にとっては笑い事じゃない。別に蓮希の事を下に見ている訳ではないが、これは中々にショックだ。

「……もう少し、頑張らないとな」

　俺は溜息をつく。ボトモンをするのはいいが、学生の本分を疎かにするのはよろしくない。

まぁ、次の模試で頑張ればいいか。

溜息を吐かずにはいられなかったものの、それでも俺はそう開き直って遥と一緒に店に向かって歩きだした。

「おっ、やってるやってる」

　どうやら間に合ったっぽい。まだ、大会は終わってなかった。

「あらぁ、二人共、よく来たね。でも、大会はもう決勝戦だけど……」

　おっちゃんが、レジから顔を出す。見れば大きめのダンボールを持っていた。中はなんだろう？　大会だから、景品か何かだろうか？

　そんな俺の視線に気がついたのだろう。おっちゃんは、ニヤっと口角を上げた。

「察しがいいねぇ。その通り。大会の優勝者と準優勝者の景品なのよ。もうちょっとで勝負がつきそうだから、持ってきたの」

「えっ、うそっ？　優斗、早く行こっ！」

「ま……待てって！」

　俺は慌てて、悠を追いかける。蓮希が戦っていると、決まった訳ではないだろうに。

「あっ、蓮希いた！　今戦ってる――ってあれ？」

「まじか？　……って、ほんとだ！」

　いつかのゲームフィールドの、赤いボックスの方に蓮希が立っていた。あのボックスは、確か隆祐が使っていたボックスだ。

　対して俺の使っていた青いボックスに立っているのは、俺達と同じくらいの年頃の男だ。中々に整った顔をしていて、髪の毛も、そんなに長くなく、首が見えるくらいの長さかつ、フワッ、サラッ、といった感じでスッキリしている。ちょっと赤みがかかった色をしているが、蓮希みたいに染めてんのかな？

「いくぜ！　俺は手札を二枚捨てて、こいつを召喚！　場にいる『鉄兵士』二体と、『エレキコマンダー』を裏向きでこいつの下に重ね、いでよ、氷結の龍！　闇をも封じる氷の化身！　吹雪の中にいでて、その力を奮え！　『』！」

　蓮希が叫び、アクターを出す。【Ａ】２９００　【Ｂ】２６００　【ｄ】５　【ＨＰ】１１０　の強力なアクターだ。というか、

「あのアクター、手札二枚の割には、なんか強くないか？」

　俺の持っている他のカードと比べると、スペックがちょっと高すぎやしないだろうかと思う。

　だが、悠は首を横に振った。

「ステータスは高いけど、あのアクターは出すときに他のモンスターを下に重ねないといけないからね。自分の場にアクターが必要だから、実質手札コスト三枚以上に相当するアクターってところじゃないかな」

「へぇ、そんなカードもあるんだな」

「てか優斗。結構カード貰ったでしょ？　入ってなかったの？」

　悠が首を傾げるが、カードを貰ったのは一昨日だ。模試の勉強もあったし、全てのカードに目を通した訳ではない。使えそうなカードを何枚か『』に教えてもらったくらいだ。

「じゃあ、全部に目を通すのは今日？」

「まあな」

　俺が頷くと、蓮希がターンを終了する。

「悠、もうちょっと高いところで見ないか？　ここじゃ見づらい」

「……でも、観客席はいっぱいだよ？　どうする？」

　見ると、観客席には、悠の言うとおり、結構な人数の人がいた。流石大会なだけあって、老若男女様々な人がいる。

つい最近始めたばかりだからよくは知らないが、これって結構人気のゲームなのな。

「あそこは空いていそうだな。行くか」

「あ、ほんとだ」

　運良く空いている席を見つけた俺は、悠と一緒に座る。ここからだと、戦っている二人の様子がよく見えた。

「あっ、あれって最新のやつじゃない？」

「……あいつ」

　蓮希の対戦相手は、どうやらストレンジャー使いっぽい。昨日ケイが使っていたから、その手ごわさは、よく分かる。だが、ライフは１２０００対２５００で、蓮希が大幅にリードしている。消失ゾーンも、六対七で、蓮希が勝っていた。手札だけは四枚対六枚で、対戦相手の方に分があるが、大した枚数差ではないだろう。場も、蓮希は【Ｌ】セルに『』がいるのに対して、対戦相手の場には【Ｓ】セルにストレンジャーが一枚だけだ。ストレンジャーはカード効果でもない限り、基本的に移動させられないから、あそこでは壁にならない。

　次のターンで相手がどうにかしなければ、ほぼ間違いなく蓮希が勝つだろうな。

　明らかな戦力差があるとはいえ、結果を予想できるようになったということは、俺のカードゲームのタクティクスというかそんなものも上がってきているのだろう。この短期間でこのレベル。自分で言うのもあれだが、これが才能ってやつか？

　と、俺は内心微笑んでいた。

そう……ここまではな。

「僕のターン！　ドロー！」

　対戦相手の声が響く。なんか、『』っぽい声だ。あいつの時もそう思ったが、男の割には、結構可愛い声だな。

「きたっ！　僕は『ストレンジャーＮｏ．１』を召喚！　そして『ストレンジャーＮｏ．１』と『Ｎｏ．５』で、オピニオンクロス！」

　全身黒タイツのやつが、同時に飛び上がり、空中で光の玉に変化する。来るのか？

「交わる想いは、新たな希望を創り出す！　僕の希望は、まだ終わってない！　ストレンジ召喚！　現れろ！　『希望聖帝ホープアンブレイカー』！」

「わっ、すごい！　あんな召喚方法もあるんだ！」

　初めて見るであろうストレンジアクターに、悠は興奮していた。まぁ、一度見ている俺も、ちょっと興奮している。ケイが出した『船艦リバーサル』とは違って、自分に敵意がないからだろうか。最も、ただの映像に敵意も何もないだろうが。

　出てきたのは、例えるなら、形はガ○ダムっぽい、メカメカしい鉄の塊に身を包んだ騎士だった。結構でかい。黄色を基盤とした鎧で、エネルギーを供給してるのか、赤いラインが所々に入っていた。

なんつーか、男心をくすぐるというか、中々かっこいいな、あれ。

　『希望聖帝ホープアンブレイカー』は出てきた瞬間、勢いよく剣を抜く。日本刀っぽい『聖なる正義の剣』とは違って、『希望聖帝ホープアンブレイカー』の持っている剣は……なんか西洋剣っぽい。全体的に赤い感じだが、血みたいなグロい感じの色ではなく、『』が魔法を付加、置換したときのような、綺麗な赤色だった。ステータスは【Ａ】２５００　【Ｂ】２４００　【ｄ】４　【ＨＰ】８０　と、『』と同じだ。

「かっけーモンスターだが、それじゃあ『』は倒せないぜ！」

　蓮希が叫ぶ。だが、ストレンジアクターの真価は、ステータスよりも、その効果にある。

　蓮希、気をつけろよ？

　まあ、流石にこのターンで負けるとは思えないがな。

「分かってるよ！　だから僕は、このカードを発動する！　魔法カード『地球からの贈り物』！」

　相手は、カードを三枚引いた。そして、そのカードを墓地に送る。

「そして、手札を三枚支払い、『メテオプロミネンス』発動！　二つの効果の中から、一つを選ぶ！　僕は、相手プレイヤーに３０００ダメージを与える方を選択！」

　空中から、炎の渦が現れ、蓮希に向かって一直線に飛んでいった。

　だが、炎は途中で、穴のようなところに吸い込まれ、消えてなくなる。見ると、得意げな顔で、蓮希がカードを掲げていた。

「前のあんたのターンで俺が公開し、手札に加えたカードを忘れたか？　手札を二枚支払って、『消滅した攻撃』を発動し、効果ダメージを無効にしたぜ！」

　それは、昨日俺がピンチを凌いだカードだった。

「ちょっとまって蓮希！　それトラップ！」

　だが、隣では悠が慌てたような声を出す。

　見ると、相手も得意げな表情をしていた。

「この瞬間、ホープアンブレイカーの効果発動！　自分が発動した効果ダメージが、相手のライフを減らさなかった時、重なっているストレンジャーを一枚墓地へ送ることで！　無効にされた効果ダメージの倍の数値分のダメージを、相手に与える！」

　そう叫んだ瞬間、ホープアンブレイカーは剣を仕舞い、腰に付いていたバズーカを蓮希に向ける。

「なっ……てことは、６０００ポイントのダメージっ？　だ……だが、それなら俺のライフは残る！」

　蓮希がそう叫んだ瞬間、金色のエネルギーが、バズーカに溜まり、蓮希に向けて放たれる。

　だが、一直線に向かっていった金色の光線は、急に、真逆の方向へと向きを返る。光線は相手の方に引き寄せられていった。

　そこには、ついさっき蓮希が出した穴と同じ穴が開いていた。その中に、光線が吸い込まれる。相手もまた、蓮希のようにカードを掲げていた。

「魔法発動！　『消滅した攻撃』！　効果ダメージを無効にする！」

　えっ？　あれって、自分の効果ダメージも無効にできるんだ。知らなかった……

　だが、ということはつまり……？

「まさか……！」

「そう！　もう一度、ホープアンブレイカーの効果発動！　効果ダメージを、さらに倍にする！　よって、効果ダメージは１２０００！」

　その瞬間、ホープアンブレイカーは、もう一つのバズーカを取り出し、二本のバズーカを腕にはめた。そして、筒先を蓮希に向け、エネルギーを溜める。

「さあ、これでフィニッシュだ！　アンブロークン・ブラスター！」

　そう叫んだ瞬間、二本の金色の光線が、蓮希に直撃した。

そしてその瞬間、赤いボックスに煙が吹き出る。

蓮希が負けた。

「……」

　うん、まあ、あれだよな。さっき『才能が～』とか思った俺は、存在しなかった扱いにはならないだろうかと、少しの間真剣に考えた俺だった。

「いやー、負けちまった」

　そう言う割に蓮希の顔は明るい。なぜだ？

「惜しかったね。あそこで効果ダメージを無効にしてなかったら、蓮希が勝ってたかもしれないのに」

　悠がそう言って、蓮希の肩に手を置く。

「まぁ、しゃーねーよ」

「……楽しそうだな、お前」

「まぁ、あのデッキの全力を出し切ったからな。悔しいけど、なんつーか、清々しいんだよね」

　へえ……なるほど。そういうもんなのか。納得。

「しかしまぁ、残念だったな。俺もまさか蓮希が負けるとは思わなかったし、途中までは勝っていたんだろ？」

「油断大敵ってことだな。優斗も覚えとけよ？」

　ケラケラ笑いながら、蓮希は俺にそう言った。なんかこう、蓮希が輝いて見える。ちょっと羨ましい。

「いい勝負だったよ。楽しかった。ありがとう」

　不意に、蓮希の対戦相手の男が、蓮希に話しかけてきた。近くで見ると、ほんと優男って感じだ。ただ、近くに来て始めて気がついたが、ちょっと目が赤い。泣いた後のような感じではないから、カラーコンタクトでも入れているのかもしれない。

「おう、俺も楽しかったぜ。ありがとな」

　なんか、新鮮な光景だ。俺が戦った相手はどいつもこいつも、ゲームの後、すぐにどっかに行ってしまったから、こういうのは初めて見る。

まぁ、隆祐のやつは……どうだろうってとこだが、それにしても爽やかだ。スポーツ系のドラマや漫画を見ている気分である。

「また機会があったらやろうぜ？　ただ、次は負けねーからな？」

「望むところだよ。僕なら、たまにこのお店に顔を出すからさ」

「おっ、そうなのか？　俺も、ここにはたまに来るんだ」

「……おい蓮希」

　二人だけの会話に、俺は勇気を出して割り込む。

「会話しているところ悪いが、その人を紹介してくれないか？　俺も悠も、ついさっき来たばっかりなんだ。お前は対戦前の自己紹介とかで知っているかもしれんが、俺達は今が初対面なんだよ」

　とりあえず、名前ぐらい知っておかないと失礼だろう。なんか、この店の常連らしいし、俺達もこれから会う機会があるやもしれん。

「あぁっ、そうだね、ごめん。僕は。愛斗って呼んで」

　愛斗が慌てたように自己紹介をする。声だけでなく、名前もなんか可愛いな。見た目も中性的というかなんというか、さっきも思ったが『』に似ていなくもない。あいつも鎧や兜を取ったら、こんな感じになりそうだ。

　ちょっと頑張って変装すれば、女に化けられるかもしれない。

「私は林道悠。悠って呼んでくれると嬉しいな」

「俺は一条優斗。優斗でいい」

「よろしく、悠、優斗」

　愛斗が握手を求めてきたので、俺も悠もそれに応じる。

「……ん？」

　握手をすると、俺は愛斗から何かを感じた。

　いや別に、愛斗から熱の篭った視線を感じた、とか、そんな『ホモ特有の何とか』みたいなものでは無く……こう、『他の人とは違うオーラ』みたいな、そんな感じだ。

愛斗も俺に同じようなものを感じたらしく、俺と愛斗はばっちり目が合う。

「……どうしたんだ、二人共？」

　蓮希に言われて、俺達は慌てて手を離す。知らないうちに、俺達は握手したまま固まってしまっていたようだ。

「そう言えば、さっきのアレ、凄かったね。私、あんなの初めて見たよ！　ストレンジ召喚だっけ？」

　ちょっと気まずい空気を読んでくれたのか、悠が話題を変えてくれた。こういう所は、ほんと気が利く。

「うん。昨日発売したばっかりのやつだけど、格好良いよね！」

　愛斗が嬉しそうに答えた。

「俺も今日初めて見たから、対処しづらかったな。これからは、ちゃんと対策しておかないと。優斗も、今日見るのが初めてだろ？」

　蓮希が俺に話を振る。ちょっと残念だが、俺は今日が二回目だ。

「いや、実際に戦ったのは昨日だな。蓮希の気持ちは良く分かるぜ。俺も苦戦させられた」

「……昨日？」

　悠が不思議そうな顔で俺を見る。そう言えば、昨日の出来事を話していなかったっけ？

「ああ、実は――」

「……おいおい、マジかよ。災難だったな」

「警察には連絡した？」

　昨日の出来事を説明すると、二人の反応はこうだ。残る一人、愛斗の反応はというと……

「……」

　何やら難しそうな顔で考え込んでいる。

「まぁ、何も取られなかったし、警察沙汰は色々面倒だし、明日は模試があったしで、特に何かしたわけじゃ……まぁ、大丈夫だよ」

「……優斗」

　愛斗が、一枚のカードを俺に見せる。『ＮｅＯ』というカードだ。通常魔法カードだが、効果の欄を見て、俺は驚く。なんと、相手に１ポイントのダメージを与える以外の効果が無いのだが……こう言っちゃ難だが、こんなカード、役に立つのだろうか？

「このカードはさ、役に立たないとは思ってても、どうしてもデッキに入れないと落ち着かないんだよね。もしかして優斗も、そんなカード無い？」

　そうは言っても、俺はこの間始めたばかりの初心者。デッキも一つしか持ってない。まぁ、強いて言うなら、

「昨日の奴が狙っていたのは……今はカードがないから見せられないけど、『』ってカードだな。なんか、特別なカードっぽいぜ？」

「……今度、見せてもらってもいい？　実は僕も、前に何度か、似たような奴に襲われてさ。まぁ勝ったんだけど」

「なっ……？」

　……お前も色々大変だったんだな。というか、ロクな奴がいないな、このゲーム。いや、悪い奴が目立ってるってだけか。

　蓮希も、同じことを思ったらしい。ふと、こんなことを呟いた。

「ったく、昨日のそいつも、この間の城島も、あのオタっぽいやつも、初心者にもうちょい優しくすりゃいいのにな。これじゃあ、優斗がゲームを楽しめやしねぇ」

「……城島？　もしかして、城島隆祐のこと？　彼に会ったの？」

　今度は、蓮希の言葉に反応する愛斗。なんだ？　知り合いか？

「知ってるの？　まぁ、有名なカードハンターだから、おかしくはないけど」

　悠が愛斗に聞いた。今の感じだと、知り合いっぽい雰囲気だ。

「うん。同じ学校の、クラスメイトなんだ。というか、友達っていうかなんというか……」

「マジかっ？」

「ホントっ？」

　蓮希も悠も、驚いたような声を出す。俺も驚いた。

　いや、別にあいつを過小評価しているつもりは全くないのだが……『友達がいる』イメージが全く無かったのだ。

「うん。正直、彼がそんなことしてるなんて、僕は信じられないくらいなんだ。学校じゃ成績優秀で、割とモテるし、問題を起こすような子じゃないんだよ。うちの学校じゃ、カードハンターの噂なんて、誰も信じてないし」

　再び二人が驚いたような声を出すが、俺は今度はあまり驚かない。正直、なんとなくそんな気はしていた。おっちゃんも、色々大変だとか何とか言っていたし。

「僕がここに来るようになったのも、彼がカードハンターをやっている現場を抑えたかったからなんだ。ここに来るのは知っていたし。でも、全然会えなくて……実際に自分の目で見ないと、どうしても信じられないからね」

　確かに、カードハンターをやっているかどうかなんて、現場を抑えないとどうしようもないしな。

「実際に会った人、初めて見た。どんな人だったか、教えてくれる？　本当に隆祐かどうか、知りたいんだ！」

「えぇっとだな……」

　蓮希が隆祐の特徴を説明する。途中で蓮希が隆祐のモノマネなんかもしてくれたが、中々似ていて、思わず笑いそうになった。

「う……隆祐だね」

　ちょっとショックな様子で、愛斗は言った。気持ちは分からんでもないが……

「愛斗、そう落ち込むな。隆祐にも、なんか事情がありそうだしな」

「あれ、優斗。あいつの肩持つのか？」

　蓮希が驚いた表情でそんな事を言うと、隣で、愛斗がちょっと傷ついた顔をした。全く、デリカシーのない男だ。

　そんな蓮希も流石に失言に気がついたのか、慌てて「わ、悪い」と愛斗に謝る。

　まあ、愛斗も思うところがあったみたいで、首を振って「気にしないで」と言ってくれた。

　とはいえ、一応フォローしておくと、だ。

「まぁ、その後戦った奴らに比べれば、トップクラスにまともな奴だよ。性格も、プレイングもな」

　これだけは、断言出来る。

「……そう言ってくれると、嬉しいよ。ありがとう、優斗」

　愛斗が俺に頭を下げる。

「気にすんな」

「じゃあ、僕はこれで。これから、隆祐のところに行ってみるよ」

「……待って。なら、俺も行こう」

　愛斗が帰路につこうとしたので、俺は呼び止め、そう言った。

　俺もあいつには、聞きたいことがある。

　だが……

「待てよ二人共」

「そうだよ、今から行く気？　もう結構遅い時間だよ？」

　蓮希と悠が俺達を呼び止める。時計を見ると、もういい時間だ。

「そ、そうだね。行くのは、明日にするよ」

「だ、だな」

　流石に今から押しかけるのは、いくらなんでも迷惑だろう。どうせ明日も休み。明日押しかけても遅くはない。こんな時間まで、隆祐もカードハントはしてないはずだ。

「あぁ、二人共！」

　不意に、おっちゃんに話しかけられる。どうやら、蓮希と愛斗に用がありそうだ。

「話は終わった？　賞品、まだ貰ってないでしょ？」

「あっ」

「やべっ、忘れてた」

　二人は同時に、そう呟いた。

「なぁ、皆」

　帰り道、蓮希が突然、俺達に言った。

「もしよければ、今日は優斗んち泊まっていかないか？」

「おい、待てよ。せめて俺の確認ぐらいとれ！」

「とかなんとか言っても、別に問題ないんでしょ？」

　悠が面白そうにそう言う。確かに問題ないが、それでもだ。親しき仲にも礼儀有りって言葉があるだろうに。

「えっ……と、いいの？　女の子もいるのに？」

　愛斗が固まったような表情で俺に聞くが、まぁ、一般常識じゃそうなるよな。

「まぁ、女子がいても、うちは大体問題ないよ。間違いは起きないって信頼されているっぽくてさ」

　全く、困った親である。信頼されているのは嬉しいが、もっとこう、年頃の男子ってものを心配して欲しい。何かあったら、捕まるのは俺だ。まぁ相手が悠じゃ、慣れすぎて、どう転んだって間違いも何も起こらないけどな。

「愛斗さえよければ、別に問題ないよ」

「でも、いきなりじゃ……迷惑じゃないの？」

「ああ。よくあることなんだ。お泊まり会なんかじゃ、大体、俺の家を提供するんだよ。前には、突然に、確か六人くらい泊めた事もあるし、気にすんな」

「じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて。あっ、そうだ。家からパジャマとか取ってこないと」

「あー、私も色々取ってこないとだね」

「俺もだな」

　まあ、必要なものは各自勝手に取ってきてくれ。流石に、そこまでの用意はうちには無いからな。前に蓮希や遥がマイ歯ブラシとかマイコップとかを俺の家に置いていこうとしたが、それは断固拒否させてもらった。親しき仲にも礼儀有り、だ。

「じゃあ、俺の家……って、愛斗は分からんか」

　言っている最中、俺は重要な事に気づく。だが、そこは気が利く遥。

「じゃあ、私達と待ち合わせって事でいい？　場所は……菅野坂駅前ってことで」

　と、提案してくれた。

「へぇ、愛斗と隆祐って、青葉中等教育学校出身なんだ。てか、同い年なんだな、俺等」

　俺の家の俺の部屋で、高校生四人は、パジャマ姿で駄弁っていた。まぁ、流石年頃の高校生ともなると、夜は長い。気が付くと、もうちょっとで日付が変わりそうだ。

「すごいねぇ！　あそこって、中高一貫の進学校じゃない？　レベル高いんでしょ？」

　愛斗の話に、蓮希と悠が驚いていた。まぁ、もちろん俺も驚いている。

「といっても、僕は成績中位で、そんなに威張れる成績じゃないけどね。隆祐なんか、この間のテストじゃ、順位は確か、上から五番目じゃなかったっけ？」

「へぇ、あいつって、成績いいのな」

　俺は、思わず呟いた。頭が悪そうだとは思わなかったが、秀才ってイメージも無い。

「あと、隆祐には妹がいてさ、その子も成績がいいんだよ」

　……ん？

「あいつって、妹がいんのか？」

　蓮希も俺と同じことを考えたらしく、愛斗に尋ねる。

「うん。って子だよ。結構可愛くて、学校じゃ人気があるんだ。何度か告白もされたみたい。全部断ったらしいけど」

「へえ、そりゃ、興味深いな」

「ただ、体が弱くて、しょっちゅう学校を休んでいるんだけどね。雷香ちゃんもボトモンをやってて、僕もよく一緒にゲームするんだ。雷香ちゃん、結構強いよ？」

「へぇ、そうなんだ」

「ねぇ、雷香ちゃんが告白されたときって、隆祐はどんな感じ？　やっぱりこう、アニメに出てくるようなお兄ちゃんしてるの？」

　悠が面白そうに聞くが、それは俺も気になる。まぁ、想像はできないが。

「うーんとね、話を聞いたり、現場を目撃すると、ちょっとソワソワするくらいで、そんなお兄ちゃんお兄ちゃんはしてないね」

　まぁ、そうだよな。そんなイメージ無いし。

隣では、悠はちょっとがっかりしたような表情をしているが、お前は何に期待しているんだ？

「あぁ、そう言えば」

　ふと、愛斗が思い出したように呟いた。

「夏休みの二週間位前から、雷香ちゃん、ずっと休んでたな。隆祐に聞いても、ちょっと体調を崩したとしか言わないし、お見舞いに行こうとしても、『感染るから』って雷香ちゃんに会わせてくれないし、よく考えてみれば、ちょっと様子がおかしかった気が……」

「……」

　俺は、少しずつ、おっちゃんの言っていた事情とやらが分かってきた気がした。

「……いや」

　だが、途中で頭を横に振る。ドラマや漫画じゃあるまいし、そんな訳ないか。

「あっ、そういえばさ」

　思い出したように、悠が蓮希に言った。

「今日の大会さ、蓮希はなんで調整用のデッキだったの？」

「……調整用のデッキ？」

　愛斗が首を傾ける。俺も傾けかけたが、すんでの所で思い出した。喫茶店で使っていたあれか。

　蓮希は慌てて俺達から目を逸らし、頭をかく。

「いや、実はさ、家に忘れてきちゃったんだよね」

「忘れてきた？」

「まあな。家に戻るのがめんどくて、学校から直接向かったんだよ。デッキは確か鞄に入れたはずだと思ったんだけどな……どうも、机の上に置きっぱにしてたみたいだ。今はあるぜ、ほら」

　蓮希が笑顔でデッキを鞄から取り出して見せるが、そういう問題じゃない。

「大会始まる直前で無いことに気がついて、それで急遽、常に持ち歩いている調整用デッキで参加したんだよ。まっ、そこそこ強いから、戦えなくはないしな」

「……てことはアレか？　つまりお前は、学校にカード持ってきてた訳か？」

「……まぁ、そうっすね」

　蓮希の笑顔がだんだん引きつる。俺は、自分のデッキを取り出した。

　取り出してから、この問題をカードゲームで解決するのは何か違う気がしたが、そんなことはどうでもいい。

「蓮希、そこへなおれ。その根性叩き直してやる！」

「まぁまぁ、落ち着いて優斗。私もたまに持っていくし」

「お前もか！」

　俺は驚愕の事実に、思わず突っ込む。

「調整用のデッキだったんだ。なら、蓮希は僕ともう一度やらない？」

　そんな俺達を楽しそうに見ながら、愛斗が提案する。

「あっ、いいな、それ。今日のリベンジってことで」

　おい蓮希、まだ話は終わってないぞ。いやこの際、悠から先に説教するか？

「まぁまぁ、細かいことは気にしない！　優斗も私と一緒にやらない？」

「えっ？　ちょっ……人の話を聞けぇっ！」

　夜中ではあるが――

　俺の声が、部屋中に響いたのだった。

「大会？」

　ゲームの最中、悠が俺に、今週末の大会についての話題を振る。おそらく悠は俺が知らないだろうと思って教えてくれたのだろうが、残念ながら俺は既に知っていた。昨日、そんなチラシが俺の家のポストに入っていたからだ。

「なんだ、優斗も知ってたんだ。じゃあ、どうするの？」

　どうするもなにも、もちろん参加するつもりだ。このゲームにも、割と慣れてきたからな。

「優斗も出るんだ。ってことは、君達三人でチームを組むことになるのかな？」

　隣で蓮希と戦っていた愛斗が、話に入ってくる。

　しかし、

「チーム？　なんだそりゃ？」

　蓮希が、不思議そうに尋ねた。悠もきょとんとしている。もちろん俺もだ。確かチラシには、個人戦と書かれていた記憶がある。

「……あれ？　この大会だよね？」

　愛斗が鞄からチラシを取り出し、俺達に見せる。俺に来たチラシとほとんど同じ紙面だが、ただ一箇所だけ、そこには確かに、三人一組の団体戦と書かれていた。

「……俺のところに来たやつは、こんな感じなんだが？」

　俺は机から、昨日来たチラシを取り出す。

「あれ？」

　愛斗は慌てて、二枚のチラシを見比べる。

　何かおかしい。

　俺達四人は、その時そう思った。いや、勿論チラシが二種類ある、と言われてしまえば納得できなくもないし、おかしいと思う明確な理由があるわけでは無い。しかし、これは余りにも、愛斗に来たチラシだけ、意図的に書き換えられているような気がしたのだ。

「明日、隆祐のところに寄った帰りに、この会社に行ってみるか？」

　蓮希がマップの、大会の会場を指し示している箇所を指でトントンと叩きながら、俺達三人に提案する。答えるまでもないだろう。勿論行くに決まっている。

「……あっ、優斗、これでトドメ！」

　悠が思い出したように『ウインドフォースドラゴン』で俺に直接攻撃して、俺のライフがゼロになる。これで通算四連敗。全員に、俺は負けていた。悠には二連敗だ。というか、俺は一回も勝ってない。

　これは、大会前に、デッキを組み直したほうが良さそうだ。

　一抹の不安はある。それでも、この時俺はそう思った。

「ここか」

　愛斗に連れられて、俺達四人は隆祐の住んでいるマンションの前に来ていた。

「えっと、こっちだね」

　愛斗について行く様に、俺達は中に入る。隆祐の部屋はこのマンションの最上階である、八階にあるらしい。マンションは新しくもなければ、そこまで古くもなく、通路は割と掃除が行き届いており、景色を遮るような建物も周りにないため、そこそこ住みやすそうだ。

　エレベーターに乗ってしばらくすると、扉が開く。

「ここだね」

　愛斗が立ち止まって、部屋の戸を指さした。愛斗はチャイムを鳴らす。

「……留守かな？」

　人が出てくる様子も無く、愛斗はそう呟く。聞けば、住んでいるのは隆祐と雷香だけで、両親とかはいないらしい。どうやら親の都合とかなんとかで、二人で暮らしているんだとか。家賃とかは親がなんとかしてくれているらしいが、高校生と中学生だけで生活するなど、その苦労は想像に固くない。俺は一人暮らしをした経験はないが、一度だけ親が二人共出張で、料理や洗濯などを、一人でなんとかしなければならなかった事があった。

　正直、その時、初めて親のありがたみが分かったのだが、それが毎日とはな。隆祐のやつ、本当に苦労しているみたいだ。

　そんなやつがカードハンターとか、こりゃ本当に、何か深刻な事情がありそうだ。

「あれ？　鍵開いてる」

　愛斗がドアノブを回して引くと、戸が開く。なんと無用心なやつであろうか。泥棒でも入ったら、どうするつもりなんだ？

「……隆祐、いるか？」

　部屋は掃除がきちんと行き届いていて、隆祐なのか雷香なのかはしらないが、掃除した人の几帳面さをあらわしているようだった。そんな中に、愛斗の声が、静かに部屋中に響き渡る。人の気配はない。

「……入るぞ？」

　愛斗がそう言って、部屋に上がる。俺達も、その後に続いた。

「隆祐？　雷香ちゃん？」

　住人の名を呼びながら、恐る恐る、愛斗が部屋の奥に進む。

　しかし、どうやら誰もいないらしい。

「……おかしいな」

　愛斗が呟くが、俺も同意見だ。隆祐の家に来るのは今日が初めてだが、そんな俺でも違和感を覚える。後ろの蓮希や悠も、同じことを思っているらしい。最初は恐る恐る中に入ってきた二人も、今は部屋の戸を勝手に開け始めて、隆祐と雷香の姿を探し回る始末だ。

「おい二人共、いくらなんでも、好き勝手に――」

「いや、でも優斗。これ、ちょっとヤバくないか？」

　注意をする俺を遮って、蓮希が反論してくる。

まぁ、確かにそうだが、それでもほら。モラルとかそういう問題があるだろうに。

いやでも、そんなこと言っている場合じゃないか。

「もしかすると、病気で動けないとか？　ほら、雷香ちゃんって、体弱いって愛斗が言ってたし」

　深刻そうな顔をして、悠が言う。その可能性は否定できない。

　だが……

「愛斗」

　俺は、キッチンにいる愛斗に声をかける。今の遥の言葉は、俺には正しいとは思えなかったのだ。

ところで、あいつはあんなところで、何をしているのだろう？

いや、まあいいか。

「二人の部屋はどこだ？」

「えっと、そこだね」

　聞きたいことを聞くと、愛斗が近くの扉を指差す。

　そう言われ、俺と蓮希は隆祐の部屋に入る。戸に『ＲＹＵＳＵＫＥ』と書かれたプレートが掛けられているので、ここで間違いないだろう。雷香の部屋は、悠が調べる事になった。流石に、女子の部屋に男子が入るのは気が引ける。

「……」

　部屋に入るや否や、悪いとは思ったが、俺は部屋を物色する。

「おいおい、優斗、いくらなんでも……」

　蓮希が慌ててそう言ったが、俺は構わず続ける。さっきはモラルがどうとか言ったが……どうしても、確かめたい事があったのだ。

「……悠！」

　しばらく物色した後、俺は部屋を出て、悠に呼びかける。

「……ん？」

　雷香の部屋から、悠が顔をのぞかせた。どうしたの？　という顔をしている。

「雷香の部屋にレアカードはあったか？」

「……？　いや、カードはあったけど、普通のカードばっかりだったよ？」

「引き出しの中とかも調べてくれ」

「おいおい、どうしたんだよ？」

　後ろから蓮希が尋ねてくるので、俺は振り返る。

「いや、隆祐ってさ、カードハンターだろ？　その割には、この家には、その奪ったカードが無いと思わないか？」

　一応隆祐の部屋から何枚か発見したものの、奪ったカードっぽくない。自力で集めた感じのカードばっかりだった。

「奪ってから売っちまったのかな？」

「……いや、それはないな。傷がついたカードなんて、そんなに高い値段じゃ売れない。あいつはどうやら、デッキに入ったカードばっかり狙っていたらしいから、余計売れなかっただろうよ」

　なるほどといった様子で、蓮希は頷き、考え込む。その時、悠が顔を出した。

「レアカードなんて、ほとんど無かったよ？　まぁ、見たことないカードは多かったけど、雷香ちゃん自身が集めた感じのカードばっかりだったし」

　それはそれで気になったが、これではっきりした。あくまでも、俺の中でだが。後は、隆祐本人から聞き出すだけだ。

「……やっぱりおかしい！」

　キッチンから、愛斗の声が聞こえる。そう言えば、あいつは何をしているのだろうか？

「愛斗、どうした？」

　俺が聞くと、愛斗は茶碗を俺に見せた。普通の茶碗だ。それがどうかしたのか？

「この茶碗、隆祐のなんだけれど、ここに置いてあったんだ」

　愛斗が、シンクの下の方を指差す。そばに行くと、今流行りの食器洗い機が備わっていた。どうやら、茶碗はその中にあったらしい。

「雷香ちゃんはこういうとこ、しっかりしているから、この中に入れっぱなしにすることなんてないんだ。茶碗はここ！」

　愛斗がキッチンの後ろの棚を差す。

「絶対ここにしまうんだよ。他にも、皿とか箸とかも入れっぱなしで、絶対何かあったって！」

「ねぇ、皆！」

　その時、悠の声がした。何ごとかと、俺達は向かう。悠が、一枚の紙切れを持っていて、それを俺達に見せる。

「これ、電話のとこのメモ用紙に書かれてたんだけど、ここってさ、大会のチラシに書いてあったとこじゃない？」

「本当だ！」

　愛斗が叫ぶ。どうやら、ここに何かありそうだ。

「皆、ここに行ってみよう！」

　俺がそう言うと、三人は頷いた。

「地図からすると、ここらへんだな」

　俺達四人は、今週末の大会の会場になる予定の、『ＢＭクリエイター』という会社の近くに来ていた。ボトモンを作っているところだが、本社は別の会社で、ここはその子会社である。

「あれかな？」

　悠が見ているさきには、おそらく会場になりそうなところがある。多分、あの会社だろう。

「行ってみよう」

　悠がそう言って、その会社の中に入っていく。俺達も後に続いた。

　中は意外と広い。俺達と受付のところにいる人以外の人が、いないからだろうか。目の前に受付があり、その近くに、社員用の通路や、エレベーターがある。壁に、『ＢＭクリエイターへようこそ』と書かれていたので、大会の会場はここで間違いないだろう。

「あの、すみません。ちょっといいですか？」

「はい。お客様、如何なさいました？」

　愛斗が、受付の女性に話しかけ、チラシを出す。俺も、チラシを出した。

「今週末の大会のことなんですけど、僕のところに来たチラシと、彼のところに来たチラシで、書かれてる事が違うんです。ここなんですけど……」

　そう言って、愛斗はチラシの『個人戦』と書かれた箇所と、『団体戦』と書かれた箇所を指で差す。

「多分、どちらもこの会社から来たチラシで間違いないと思うんですけど・・・・・・どっちが正しいんでしょうか？」

「大会ですか……只今、係の者に確認して参ります。少々お待ちください」

　そう言って、受付の人は奥へと消える。

だが……

　数十分後。

「なあ、遅くないか？　もう十分も経つぞ？」

　蓮希がそう呟く。確かに遅い。そんなに時間のかかるような事ではないはずだ。

「遅いっていえば、もうお昼なのに、誰も来ないね」

　悠が時計を見ながら呟いた。今十二時半。俺達は学校が休みだが、今日は平日。一般の会社は、普通にやっているはずで、昼休みでもおかしくない。見渡すと、社員食堂があったが、今日はやっていないのか、中には誰もいなかった。

「……なあ。ここ、ちょっとおかしくないか？」

　思わず、俺は呟いた。冷や汗が額に浮き出るのが分かる。平日に社員食堂がやっていないとか、あるはずがない。仮にあったとしても、お昼を外で食べる人もいるだろうから、人の出入りがあってもいいはずだ。そもそも、俺達以外の人がいないことが、既にありえない。なんだか気味が悪いぞ、この会社。

「階段がある。上に行ってみよう」

　愛斗がそう提案する。ちょっと怖いが、ここで待っているよりはずっといい。俺はもちろん、蓮希と悠も頷いた。

　その時だ。

「待て」

　不意に、入口の方から声が聞こえる。同時に、シャッターが閉まる音がした。振り返ると、黒いフードを被った奴がいる。野太い声から察するに、男で間違いないだろう。こいつと今日会うのは初めてだが、俺は多分、こいつがどんな奴か知っている。一昨日、こいつと似たような奴と戦ったからな。

確か……

「『ファントム』っつったっけな？」

「一昨日襲ってきた奴のいるグループか？」

　蓮希が俺に聞いてくる。俺は頷いた。俺は意外と落ち着いていた。変なのに絡まれるのが、今日が初めてではないからだろう。見ると、愛斗や蓮希も落ち着いているように見える。蓮希は度胸あるやつだし、愛斗も昨日の話からするに、こういったことは経験済みのようだ。悠だけは、ちょっと後ろで、俺達を盾にするようにして隠れ、声も出せない様子で男を見つめている。まあ、無理もないか。

「お前が一条優斗か。話はケイや隆祐から聞いている。隣にいるのは、星空愛斗だな？」

　男がそう言って、俺は思い出す。そういえば、隆祐も、『ファントム』に所属しているんだっけ？　その後のケイとの戦いがインパクトあって、そんな事忘れてた。

「おいおい、そんな大事な事忘れんなよ！」

「すまん。完全に忘れてた」

「話は終わったか？」

　俺と蓮希に、男は聞く。男は既に、ゲームディスクを付けていた。まぁ、ケイと同じなら、そうするわな。

「俺はアール。君達二人の『』と『ＮｅＯ』のカードをいただきにきた」

　アールと名乗るそいつは、フードを脱いで、俺達にそう言う。意外と若い男だ。健康そうな肌に、メガネをかけている。髪も清潔な感じにポニーテールに纏められているせいか、野太い声とのギャップが、ちょっとおかしい。いや、笑っちゃいかんな。

「けっ、渡すと思うか？」

　蓮希が勇敢にそう言ってアールを睨むが、アールはそれを鼻で笑う。

「逃げようと思っているのなら、止めた方がいい」

　確かに、ただ一箇所しかない出入り口がシャッターで塞がれている今、逃げ場はないだろう。窓から逃げるという手もあるが、簡単にはいきそうもない。

　ここから出るには、こいつを倒す他なさそうだ。いや、もしかすると、仲間が後ろで控えてる可能性もあるか。まぁ、全員倒せば問題はないのだろうが、ちょっと大変だな。

「一ついいか？」

　ふと疑問が湧いたので、俺はアールに尋ねる。

「大会の情報は、嘘なのか？」

「いや」

　アールは首を横に振る。そして、隣を指さした。

「大会の会場は、ここではない。この建物の隣の建物だ。ここは既に潰れた会社を、俺達『ファントム』が占拠したというわけさ」

　なるほど。つまり俺達は、間違えて違う建物に入ってしまったというわけか。

「じゃあ、あのチラシは？」

「あれは、俺達が作ったチラシだ。星空愛斗をおびき寄せるためのな。他にも、目当てのカードを持っている奴にも似たようなチラシを配った。そうすれば、配ったやつの何人かは、今のお前らみたいに、間違ってこっちのビルにやってくる。そこを狙って、カードを奪おうってわけだ。一条優斗、お前だけは、時間が無くって、チラシを配ることが出来なかったから、一昨日ケイを向かわせたが、こうして星空愛斗と一緒に来てくれるとはな」

　なるほど。実力のあるゲーマーが集まると面倒だから、こうしてこちらのミスを誘ったって訳か。そうなると、回収できなかったカードを奪うために、今週末の大会にも、こいつらの仲間が参加しているかもしれない。

　しかし、それなら尚更、ここにはこいつの仲間が大勢きそうだな。今いるのは四人。しかもその内二人が、こいつらの目当てのカードを持っている。こんな又とないチャンス、逃す馬鹿はいないだろう。

「さて。では、どちらからやる？」

　ディスクを構えて、アールが聞く。それにしても、念の為に、ゲームディスクを持ってきて良かった。無ければ、こいつらに対抗出来ない。

　あ、いや……なければ、こいつが貸してくれたりとかするのだろうか？　こいつ等は、ゲームに関してはルールを守るみたいだし。よもや、リアルファイトで強引に、なんてことはしないだろう。

　まあそれは置いておいて、だ。

　俺は愛斗の方に目を向けると、愛斗も同じことを考えたのか、俺と目があった。

　昨日初めて出会ったばかりなのだが……愛斗は、アイコンタクトがやけに上手い。言いたいことが、よく伝わってくるのだ。

　その目曰く……なる程。分かったよ。

　俺が頷くと、愛斗は少しだけ口角を上げた。

「僕が相手だ」

　愛斗が、前に出る。アールに向けた目は真剣そのものだ。それは、あいつも分かったらしい。

「いいだろう。かかってこい」

　アールがそう言うと、愛斗もアールも少し後ろに下がる。俺達は、愛斗の少し後ろに隠れた。

「ゲームディスク、セット！　ムーブパレット、セット！　デッキ、オン！」

　愛斗の声が、響く。

　そして、

「ゲームスタート！」

　二人がそう叫んで、ゲームが始まった。